

豊臣政権の寺院整備－庭園の調査成果を中心に－

(財)京都市埋蔵文化財研究所 近藤 奈央

はじめに

寺院が多い京都に特徴的な発掘調査として、「整備・修理事業に伴う庭園調査」があります。文化財庭園と呼ばれる、歴史的・文化的価値が高いと認められ、国や市から特別名勝や名勝などの指定を受けた庭園は、掘削を伴う整備・修復を行う際には埋蔵文化財による調査が必要とされています。庭は、時間の経過とともにある部分は壊れ、ある部分は後世の手が加わることにより、もとの庭園とは意匠や趣の異なる別の庭園へと変化していきます。その変化した庭園を出来る限り旧態に戻して修復することが、修理事業における重要な目的の一つとなっています。最初に、昔の造庭技術を解明する調査を行いますが、現在も機能している庭園であるため、大規模な調査を行うことができません。また、清掃が滞りなく行われている寺院の庭園では、出土遺物に恵まれないことも多く、「秀吉や豊臣政権が関わった整備の痕跡」と実証することも、時代を特定することができない場合も良くあることです。しかしながら、そのような制約のある中で、埋もれていた遺構を発見し、作庭当時または改修当時の技法などを明らかにできたという成果が上がっています。

調査を行った寺院の中には、秀吉または彼の近親者ゆかりの寺があります。調査によって造庭技術が明らかになり、さらに古い遺構が発見された醍醐寺三宝院庭園、西本願寺滴翠園、建物の痕跡が見つかった高台寺、地鎮遺構や建物痕が検出された寂光院の調査成果を紹介します。

醍醐寺三宝院庭園

京都市伏見区にある真言宗醍醐寺派総本山醍醐寺の子院の一つで、平安時代後期に創建されました。灌頂院と呼ばれていましたが、醍醐寺の興隆を念じて、三法に因んで三宝院と改められました。当初、仁王門北側の敷地にありましたが、応仁・文明の乱（1467～1477）による戦火を受けて焼失、その後は衰退の一途を辿りました。安土桃山時代に入ると、秀吉の信任を得ていた義演は、金剛輪院（仁王門北西、創建は鎌倉時代末）を復興し、醍醐寺伽藍の復興に努めます。この金剛輪院が現在の三宝院です。

醍醐の花見は、慶長3年（1598）3月15日に催された豊臣家の花見です。その前年、秀吉は醍醐寺に清遊して桜を見物し、その際に花見を思いついたと言われています。自ら足を運んで縄張りを行い、上醍醐へ上がる道筋にある檜山と呼ばれる平場に御殿を建造し、花見の前月には各地から集めた桜の移植を行うなど、花見の準備は入念に行われました。三宝院の造園・建築は翌年の天皇行幸予定

に合わせて、4月から工事が進められました。庭の縄張を行った翌日に、聚楽第から謡曲「藤戸」にも謡われた藤戸石を運び込み、5月半ばには完成します。5月から始まった建築作業は着手後まもなくの8月に秀吉が亡くなったため、一時中断を余儀なくされますが、北政所（ねね）の援助によって9月から再開されました。大規模な改造計画は白紙に戻されましたが、12月には大部分が完成しました。その後、慶長4年（1599）から寛永2年（1625）までの26年もの間、座主であった義演の熱心な造庭によって、現在に近い三宝院庭園が完成しました。

整備に伴う調査では、金剛輪院時代の池跡や建物跡など、近現代の旧排水施設を検出しています。また、安土桃山時代から江戸時代前期の護岸施工法が明らかになりました。

西本願寺滴翠園

本願寺は、秀吉から現在の堀川通七条の土地を寄進され、天正19年（1591）に大阪の天満から現在地へ遷移してきました。その南東に位置する滴翠園は、飛雲閣とこれに北面する池を中心とする回遊式庭園です。飛雲閣が聚楽第から移建されたと伝えられていますが、移築時期について諸説があり、移築痕跡が確認されていないことから、この庭のために造られた建物と考えられています。『洛中洛外図』などの絵画資料を参考にすると、元和3年（1617）の火災前後には、飛雲閣またはその前身となる楼閣建築が建てられ、これにともなう池庭が造られていたことがわかっています。滴翠園には、明和年間（1764～1771）に大規模な庭園整備が行われた記録が残っており、また、『滴翠園十勝絵』という詩と絵画の描かれた巻物が現存しています。その他にも、多くの史料が残されていたことから、現在の庭との比較検討が可能になりました。

調査では、旧護岸石や滝石組、旧給水施設、船着場、明和期以前の井戸枠などを検出し、絵画に描かれた施設がそのまま埋没していることがわかりました。

高台寺庭園

高台寺は東山山麓にある臨濟宗の寺院です。北政所であった高台院が、慶長10年（1605）に豊臣秀吉の菩提を弔うために発起し、徳川家康が周辺の寺地を整備して高台寺を創建しました。創建当時の建物として、開山堂や霊屋があり、霊屋は伏見城の遺構を移したとされています。開山堂の西側には、大方丈から延びる桜船橋や観月台、池の中に鶴亀小島、景石などが配置される庭園が広がっています。

今回は小方丈再建のため、大方丈の北側にあった小方丈跡地を調査しました。小方丈は創建当時から造られていましたが、寛政元年（1789）2月に起こった火事で焼失してしまい、それ以来再建されませんでした。調査の結果、その建物東端を表すとみられる南北方向の瓦列や敷石を検出しました。瓦の年代から江戸時代初期に造られたと考えられます。また、周辺では焼土を発見しており、寛政の火事を物語るものとみられます。

寂光院本堂

寂光院は左京区大原にある天台宗の尼寺で、開基は聖徳太子と伝えられる名刹です。平安時代末の壇ノ浦の戦い後、建礼門院徳子が出家して、高倉・安徳天皇および平家一門の冥福を祈って隠棲したところでもあります。慶長年間（1596～1614）に秀吉の側室である淀君が本堂などを再興しました。本堂に掲げられていた扁額は豊臣秀頼から寄進されたもので、母の淀殿が現世と来世で安楽に暮らせるようにとの願いから再興した経緯が書かれています。

調査では、淀君の再興の際に造られたとみられる遺構を発見しました。本堂内陣にある御本尊のほぼ真下に当たる場所に、土師器皿で蓋をした壺が正位置で埋納されていました。時期は桃山時代末から江戸時代初期とみられます。壺の上部と底部下には、同一個体の白磁壺片が置かれていました。また、底部下の白磁壺片下にはネコの上顎や臼歯の破片が少量納められていました。修理に伴う地鎮遺構と考えられます。その他、平安時代末以前の礎石列、平安時代末から鎌倉時代前期の基壇整地層を確認しました。

参考文献

醍醐寺三宝院庭園

- 『平成14年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 『平成15年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 『平成16年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 『平成17年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 『平成18年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 『平成19年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年

西本願寺滴翠園

- 『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 『平成13年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 『平成14年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 『平成15年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年

- 『平成16年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 『平成17年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 『名勝滴翠園記念物保存修理事業報告書』宗教法人本願寺 2009年

高台寺庭園

- 『平成17年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年

寂光院

- 『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003年



図1 寺院所在図 (『古寺巡礼 京都38 寂光院』淡交社 2009年、139頁を改変)

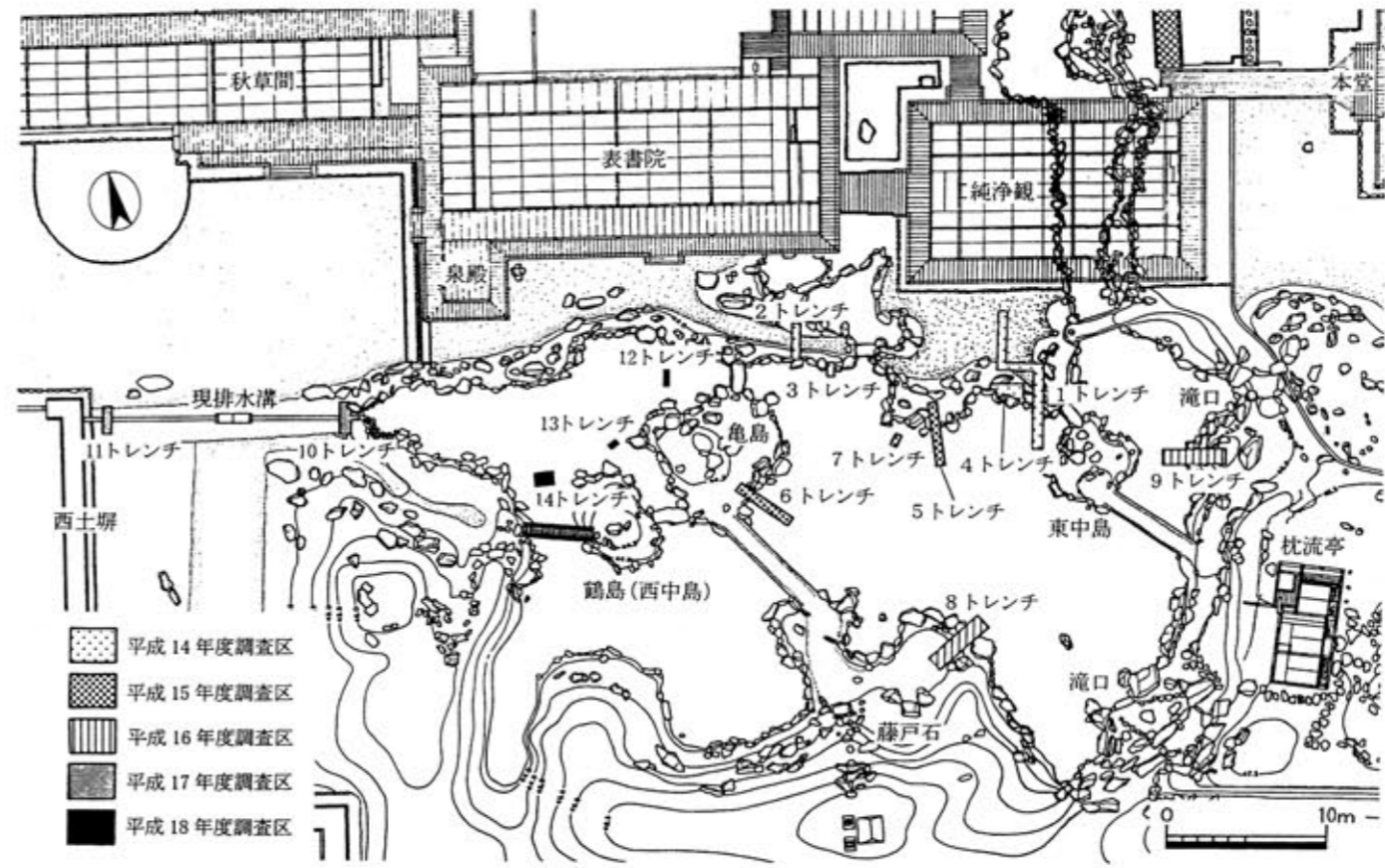


図2 醍醐寺三宝院庭園：調査区配置図

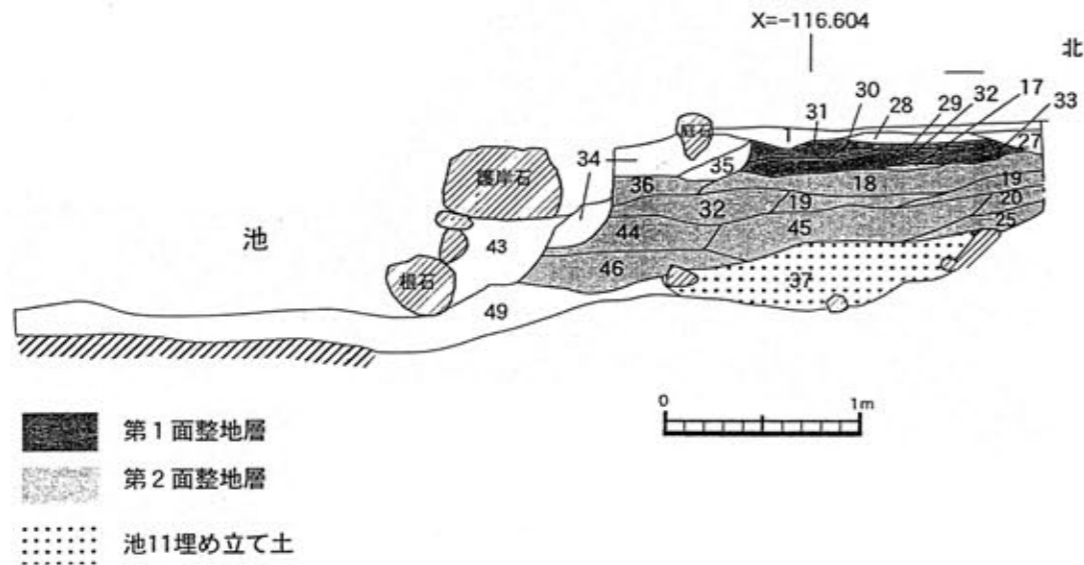


図3 醍醐寺三宝院庭園：1トレンチ南北断面図

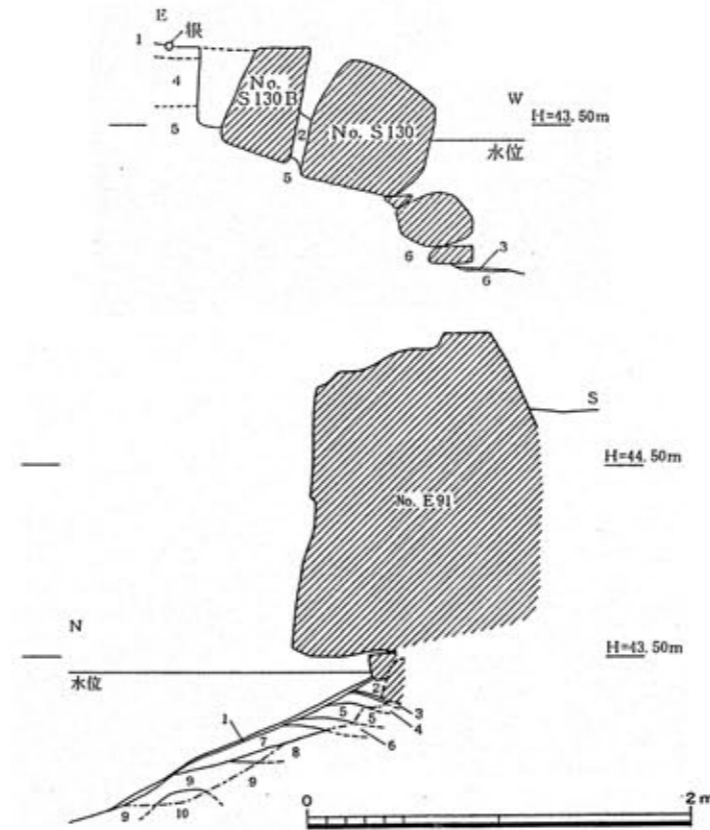


図4 醍醐寺三宝院庭園：南岸(上)・東岸(下)の護岸石断面図

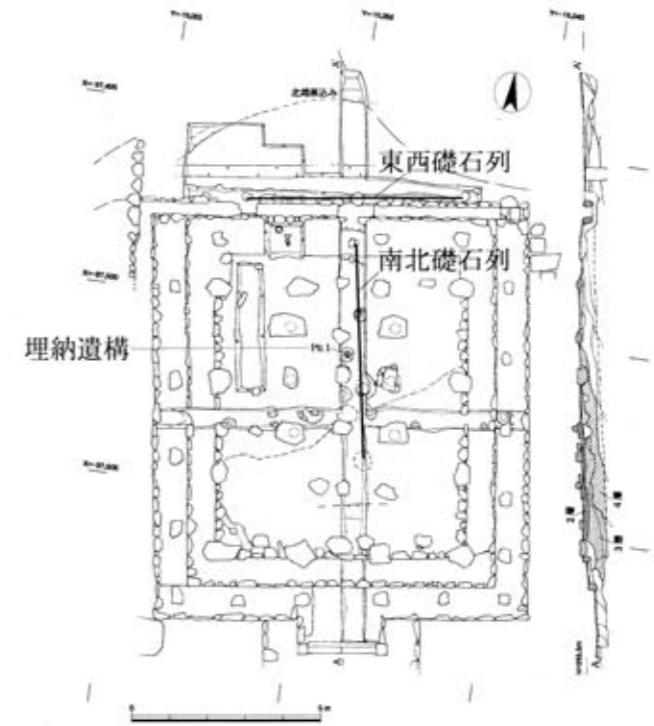


図5 寂光院：本堂遺構実測図

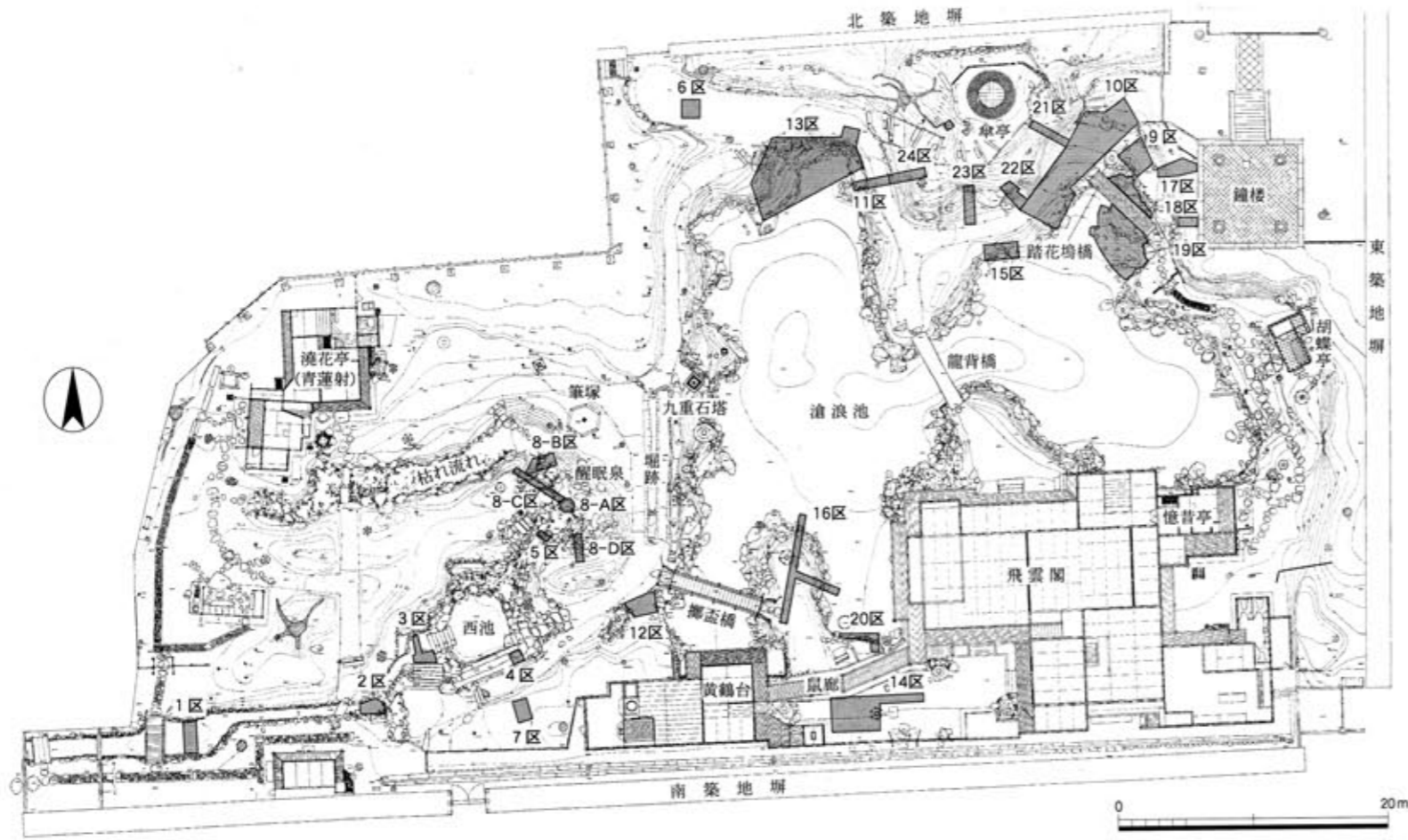


图6 西本願寺滴翠園：調査区配置図

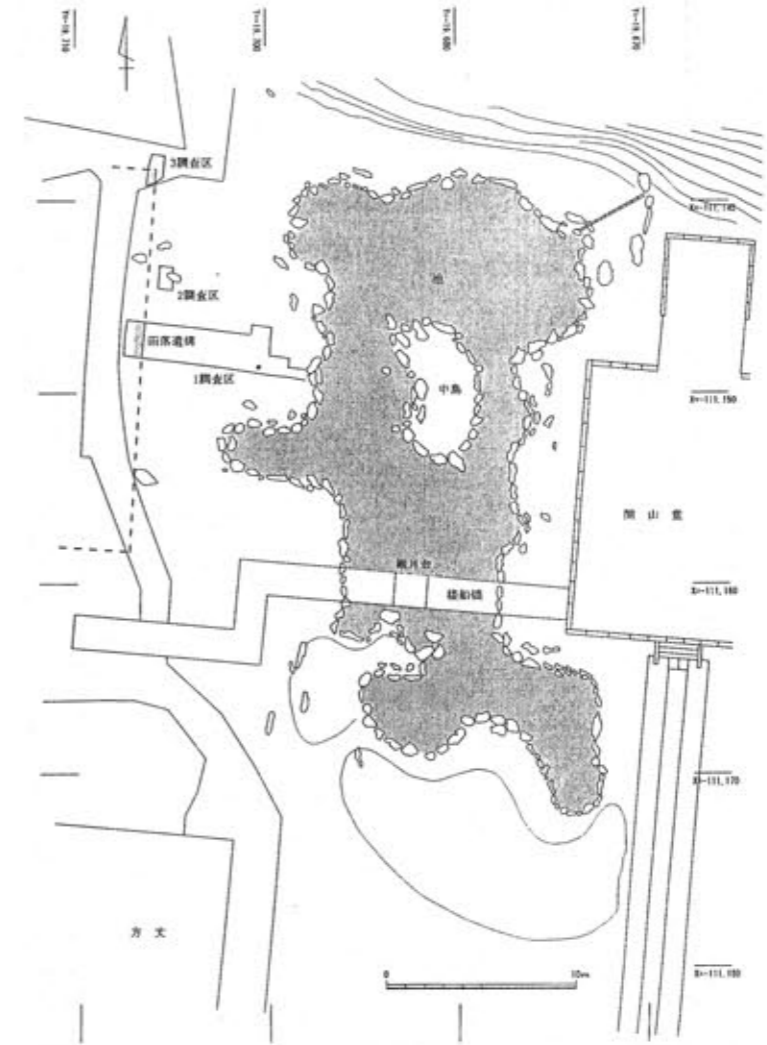


图9 高台寺庭園：調査区配置図



图7 西本願寺滴翠園：10区実測図

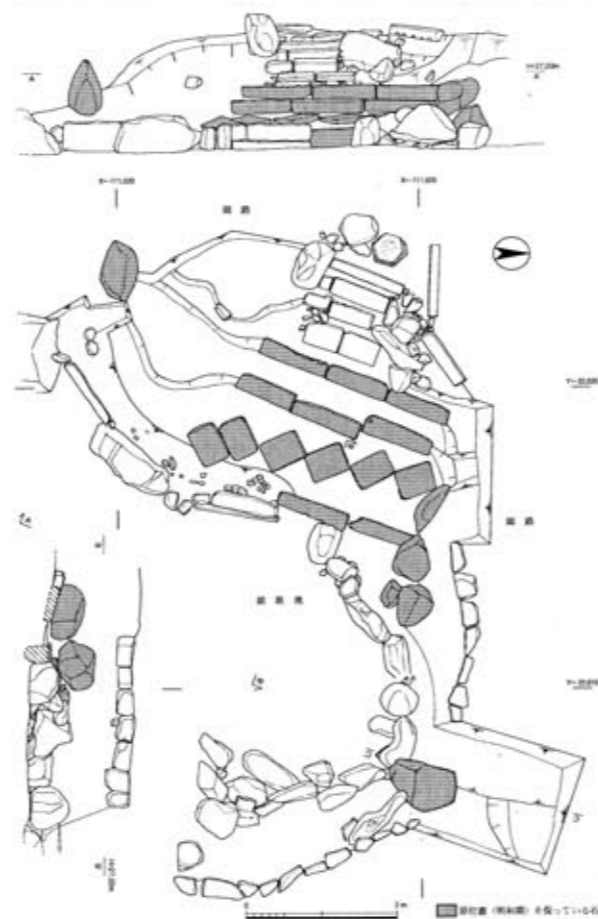


图8 西本願寺滴翠園：13区実測図

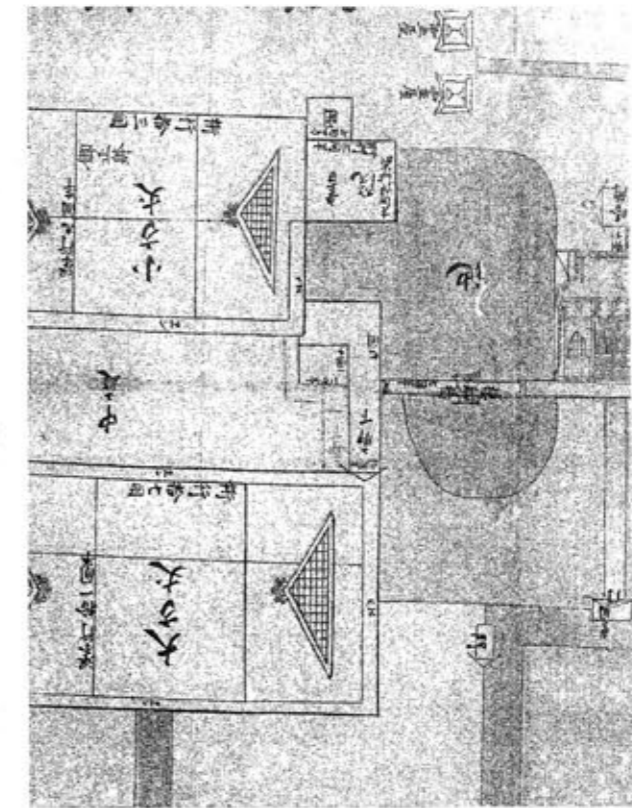


图10 高台寺所蔵古絵図（上が北方向）